

◎ 厳冬続く地方のレジャーパーク

大分農業文化公園・「パークアルカディア」(1)

広大な景観と子供向け設備の充実で滞在性・娯楽性を強化
「花昆虫館」では一般市民の参加・運営スキームを導入
参加体験チャンスが限られ、農業文化浸透はこれから

2006年1月6日

※書籍「レジャーパークの最新動向2002」(2002年8月発行)の記事を掲載しています

2001年4月21日に86億円の事業費を投入してオープンした「大分農業文化公園」(大分県速見郡山香町大字日指1-1)は、敷地総面積約120ha(うちダム湖37ha)、東京ドームの約24個分にもなる、わが国でも最大規模の農業公園となった。開園に合わせて、大分空港及び大分自動車をつぶ有料道路・別府宇佐道路に「大分農業文化公園I.C」が開設され、県内外の広域アクセスも可能になっている。



危機的な地方財政のなか、この公園を建設した背景には、大分県では“例によって”平松守彦県知事の意向が強く反映されている。県政の中で「新農業プラン21」のなかで知事は、21世紀の農業・農村の時代に向けた政策として「特に都市と農村の交流、農業への理解が必要」であると力説していた。そんなとき、南フランス・モンペリエ市郊外にある「アグロポリス博物館」を訪れたことで意を強くし、同様の施設づくりが始まった。

公園のコンセプトは、「出会いと収穫の体験フィールド」。豊かな自然と楽しみながら、農業・農村の文化を学習する場を提供することにより、農業・農村に対する理解を深めると共に、新しい農業・農村の発信基地となる場所として位置づけられた。ランドデザインは、「発見」「参加」「癒し」をテーマとするゾーニングで構成される。

事業体制だが、大分県が施設の建設を行い、県の外郭団体「社団法人大分県農業農村振興公社」へ管理運営を委託。実務は公社の内部組織「大分農業文化公園管理事務所」が担当している。

2002年4月18日付けの大分合同新聞によると、開園後およそ1年が過ぎた同年3月末までの入場者数は45万4,479人で、目標の40万人を上回っている。県農政企画課が行った当該公園に関するアンケートでは、約7割が「満足」「やや満足」と答え、「また来たい」も約7割となった。来場客には幼児・保育園児連れが多いのが特徴である。

こうして、初年度(2001年度)の事業収入は3億7千万円の見込みで、人気と認知がこのまま高まっていけば、開園5年以降は入場者数が25万人で安定し、約2億4千万円の収入が確保できると県では試算している。

農業公園が多数先行する九州において、事業面で順調な滑り出しとなった大分農業公園。それは、他にはない「大規模の」の強みなのか、それとも生活者の支持を集めるようなマーケット・インの施策による結果であろうか?そこで現地取材し、人気の秘密を探ってみることにした。

1. 事業の経緯

平松大分県知事の強いこだわり

はじめに、2001年4月21日にオープンしたこの「大分農業文化公園」の、そこまでの経緯、コンセプトメイク等を東禮一郎園長へのインタビューから整理してみる。

○南フランスにある『アグロポリス博物館』が雛形

公園建設の背景として、平松守彦大分県知事が、南フランス・モンペリエ市（注1）郊外にある『アグロポリス博物館』（http://www.agropolis.fr/）を見学した経験がフックとなった。

同博物館は、農業の起源と歴史、世界の農業システムなどをテーマに、写真・ビデオ・模型などの視聴覚資材を用いて展示解説を行っている。また、空間的には、教育施設、会議場などとしても利用されている。

当時、平松知事は県政の中で、「新農業プラン21」に基づき、21世紀の農業・農村の時代に向けた政策を展開しようとしており、アグロポリス博物館の経験がフックとなって、「特に都市と農村の交流、農業への理解が必要であるということから、その拠点となる『アグロポリス博物館』を大分につくろうと考えたのが発端」である。

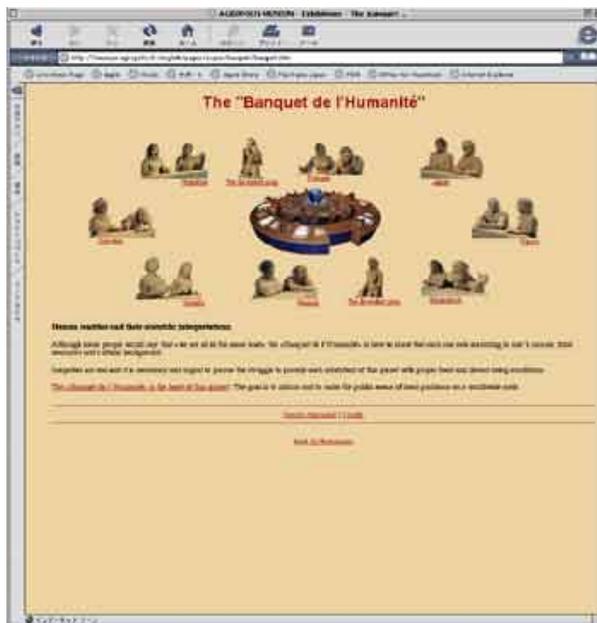
それから表1のような展開で計画が進められた。施設の方向性については、本誌でも取り上げている「プロダクト一体型の「神戸市立農業公園・神戸ワイン城」を視察するなどして熟成を図ったという。

しかし、計画時の1991年まではバブル経済の絶頂期で、平松知事の「どこにもないものを」とする熱い希望から、計画にはあらゆる施設機能を盛り込んだ。それが、不況による経済情勢の変化で、部分的な変更を多々余儀なくされ、当初の考え方と完成型では若干の差異が出てしまったと東園長は悔やんでおられた。

表1 設立までの沿革

1990年6月 (平成2年)	新農業プラン21の中に当施設が位置づけられる
1991年12月 (平成3年)	県内12カ所の中から現在地を選定
1993年 (平成5年)	基本設計
1995年 (平成7年)	着工
2001年4月21日 (平成13年)	開園

また、オープン直前には、国際日本文化研究センターの川勝平太教授が訪れ、「21世紀に実現するモデル公園となることを期待する」と賞賛している。さらに川勝教授の提案によって、当初予定していた「エコパーク」という愛称から「パークアルカディア」へ変更したという逸話もある。



示テーマとする。

「アグロポリス博物館」のホームページより、「世界の食卓」展示の説明。同館ではこの他に「農業と食糧の歴史」、「世界の農民と農業」、「世界の農業景観」を展

2.現況

上々のオープニング効果、初年度目標

40万人を上回る46万人が来場

2002年4月18日付けの大分合同新聞によると、同公園に置ける3月末までの入場者数は45万4,479人で、目標の40万人を上回っている。特徴として、約25%が幼児・保育園児だという。

満足度については、大分県農政企画課が行ったアンケート（回答287人）結果によるとは、「満足」＋「やや満足」が65%、さらに再来園希望でも「また来たい」が約7割を占めるほどの人気を博している。

初年度の事業収入は3億7千万円の見込みで、県では開園5年以降の入場者数が25万人で安定し、約2億4千万円の収入があると試算している。

❖ 厳冬続く地方のレジャーパーク

大分農業文化公園・「パークアルカディア」(2)

3. 空間

“発見”“参加”“癒し”

3つのキーワードを設定

同公園のコンセプトは、「出会いと収穫の体験フィールド」。豊かな自然のなかで農業・農村について、その文化を学習する場を提供して、その理解を深めると共に、新しい農業・農村の発信基地として位置づけている。そして、テーマは“発見”“参加”“癒し”の3つキーワードを設定して、対応する施設を配している。

なお、キーワードとゾーニングは対応していない。どこでも「自然と親しめる」わけで、「農業を知る」ことが可能である。もちろん「農業で遊ぼう」と思えば本格的・専門的な施設で参加トライアルを可能としている。

(1) 発見 / 「農業を知ろう」

農産物の生産の場である農業・農村を、21世紀を担う子供達はもちろん一人でも多くの人に農業を理解してもらい、農業の大切さを知ってもらおう。

■「豊の国物産館」：県内の加工グループ等によって生産された一村一品、地元の特産品、季節の花やオリジナル商品等が、お土産として購入できる。また、ソフトクリームなど乳製品や食品の製造・販売、各種ワインの展示・試飲・販売を行っている。

■「花昆虫館」：変化に富んだ雰囲気のある空間に、一年を通して四季折々の草花、鉢植えが栽培され、熱帯・亜熱帯の樹木や観葉植物などが鑑賞できる。また、国内外の珍しい蝶をはじめとした昆虫にも触れながら農業や自然との関わりを深く知るコーナーも設置。

■「薬草薬木の森」：百種類以上の薬草や薬木を栽培。その効用をじっくり知ると共に、ゆったりと鑑賞できる。

■「果樹園」：温室にはポピュラーなナシ・ブドウ・ミカンなど様々な品種の他、日頃あまり目にすることのないチェリモヤ・マンゴーなども栽培。露地ではヤマグワ、ザク口、ケンポナシ、グミなど素朴な果樹もある。

■「電動トラムカー」：環境に配慮したバッテリータイプの連結自動車（てんとう虫1号、2号）。定員は40名で湖畔の風景を満喫できる。

(2) 参加 / 「農業で遊ぼう」

生産されたモノを買うだけではなく、クライנגアルテンなどで自らも植え付け、育て、収穫する楽しさを体験してもらおう。また農業祭や各種イベントに参加し、遊びながら生産の喜びを知ってもらおうと共に、都市と農村との交流を接客的に進めてもらう。

■「クライנגアルテン」：1区画約40平方メートルの貸し農園を51区画設置。作物を育てることや収穫することの喜びを体験することができる。

■「研修館」：500人対応の大研究室・農業農村紹介コーナー・手作り工房・調理実習室・会議室などを完備。だれもが気軽に参加できる講演会、料理教室、体験講座などを開催している。

(3) 癒し / 「自然と親しもう」

草花・昆虫・樹木・土等に触れ、生命観あふれる自然の息吹の中で、心も体もリフレッシュし、疲れた体を心ごと再生してもらおう。

■「フラワーガーデン」：湖面に向かってスロープ状に展開する花園は、山並みをイメージ。チューー

リップ、ロベリアなど四季折々の露地花を観賞できる。

■「ハーブガーデン」：多種多彩なハーブが、ところ狭しと栽培されている。

■「コテージ」：冷暖房、シャワーを完備したロッジ風の宿泊施設を5棟設置。農場の自然に包まれた時間を肌で感じながら過ごすことができる。

■「オートキャンプ場」：クルマでそのまま乗り付けられるキャンプ場を30サイト設置。キャンプ用品のレンタルもあり。

■「ふれあい動物園」：国内外で見かけるヤギ、ヒツジ、アヒル、ウサギ、アイガモ、ウマなどと直接ふれあうことができる。

■「大型遊具」（コンビネーション遊具）：

プレイファームランド／農場にある道具の数々をモチーフにした遊具を設置

風のリズム広場／オランダ風車を目印に、遊具を設置した広場

レイクサイドキャッスル／絵本に描かれるような湖畔のお城をモチーフにした遊具を設置

■「レストラン」／1階は山香産の大麦を使用した地ビールの製造工場と、新鮮な「山香牛」や山香米などを食材としたバーベキューレストラン。

2階は安心院町（あじむまち）産の旬の食材を用いた和風レストランで、地元の味覚が楽しめる。

○農村の生活文化伝承を目的に、セミナー開催

公園の果たす役割には、公園内の施設や設備を活用して、「農業・農村の文化情報の提供」を図りながら、「都市と農村との交流促進」の具体化も重要である。

そこで、「都市と農村の交流促進」のために、まずは舞台の整備というわけで、同県別府市にあった『農村婦人の家』をここに移設して『大分県都市農村交流研修館』としてリニューアルオープンさせた。

その上で、農村で育まれた生活技術の次代への伝承を目的に、知事が認定した“ふるさと生活技術一番さん”（認定数約200名）を講師に迎え、県下の農村・漁村の女性を対象に、定期的なセミナーを開いている。

講座の設定では、農産加工基礎講座、野菜料理講座、おふくろの味伝承講座、留学生を交えて海外の家庭料理、材料から育てる草木染講座、陶芸講座、ふるさと技術伝承講座など、多岐に渡っている。

○集合住宅増加のため、大人気の「クラインガルデン」

多種多様な施設が整備されたわけだが、最も人気があるのは、「クラインガルデン」で、すでに申込が区画数を超え、キャンセル待ちの状態にある。さらに、2001年度から契約を継続する割合が6割以上を占めている。

契約者が自分の手で土に肥料を入れて育ててきた愛着や、秋に植えた春野菜の収穫に期待しての現象である。そうした契約者のプロフィールとして、マンションのような集合住宅暮らしが多く、コテージやオートキャンプの営業期間は、それらに泊まり込みで土いじりを楽しみ、収穫した農作物はバーベキュー等で味わうのがスタイルとなっている。

4. 運営

一般の知識を活用、地元雇用にも配慮

事業体制だが、大分県が施設を整備し、県の外郭団体「社団法人大分県農業農村振興公社」へ管理運営を委託。さらに実務は公社の内部組織「大分農業文化公園管理事務所」が担当している。スタッフの内訳だが、県職員3名、プロパー2名、民間企業出向者（銀行、旅行）2名、契約職員20名の計27名で運営している。

公園内の植栽をはじめとする植物のメンテナンスは農協主催の人材活性化センター等にアウトソーシングして、地域の雇用に貢献している。またフラワーガーデンなどの草花の苗は地元（山香町、安心院町）の農家から仕入れて、地域の産業活性化に配慮している。

公園の目玉でもある「花昆虫館」の実務運営は、地元の趣味サークル「大分昆虫同好会」所属の2名が設立した「有限会社EAO」（三宅武代表取締役）に委託している。豊富な専門知識で、同館の立ち上げ時から、標本展示から生体飼育までの監修に関わっている。

ちなみに県庁の組織にあっては、公園は農政部農政企画課農業農村対策班、研修館は農政部営農指導課が担当となっている。

レストラン、土産物屋はテナントとして入居。レストランは、公園が山香・安心院2町にまたがることから、山香町（山香牛と山香ビール）、安心院町（地元で採れる旬の食材を生かした和食）が1店ずつ出店している。

5. 集客

地元ファミリーが75%、
平日に多い高齢層のバス観光客

年齢層は幅広い。中心は子供連れの家族客で、子供の約25%が、幼児・保育園児ということから、ヤングファミリー向けのイベントを実施している。2002年3月の春休みイベントは、「巨大迷路にチャレンジ」「フラワースタンプラリー」「シャボン玉を大空に飛ばそう」など。また、交流館で実施する体験講座についても、リーズナブルな参加料設定が好評である。

また、平日に観光バスで来園する高齢層が予想以上に多いという。そこで、こうしたお年寄りにもリピートしてもらえるような企画を思案中である。

駐車場のクルマのナンバーで判断すると、大分県内が約75%、県外が25%。県外客は福岡がほとんどで、熊本、宮崎からの客は少ない。また、2001年は「北九州博覧祭」「山口きらら博」に北九州や山口方面客がとられた格好になったが、2002年からは回復すると見ている。

[次ページ 6.訪問してのインプレッション〈1〉](#)

❶ 厳冬続く地方のレジャーパーク

大分農業文化公園・「パークアルカディア」 (3)

6. 訪問してのインプレッション (1)

(1) アプローチからエントランスへ

○公園専用?日本一長い名前のICからすぐのアクセス

前泊した中津市のホテルから、国道10号、「宇佐別府道路」経由で、日本一名前が長いインターチェンジとなった「大分農業文化公園I.C.」に向けて、平日のためか通行量の少ない山間の対面通行道路を快調に南下していく。このインターチェンジ名は、ローマ字で表記すると、その長さが実感できる。ちなみに第2位は同じく九州で、九州自動車道「溝辺鹿児島空港I.C.」である。

このインターチェンジはその名前の通り、大分農業公園のアクセスのために造られた。ICを降りてからも、オープン後まだ間もないためか、道路は新しく、そこから公園の駐車場までわずか2~3分だが、途中要所にモニュメントのような立派な案内看板が設置されており、迷うことなく「正面ゲート」到着する(この他、「東ゲート」からのアプローチも可能である)。駐車場は広大で、普通車は900台、大型車は18台の規模である。また、路線バスもあり、中津駅~大分駅間の運行で、1日4往復が停車する。バス停には公園近隣の観光名所をパネルで紹介して、周遊を促している。

正面ゲート前のメインエントランスは広場となっており、多客時の混雑緩和に対応している。また、テントによる「野菜直売コーナー」がある。あいにく冬季の2月末までは土・日・祝日のみ、3月からは毎日営業となる。いわゆる“青空市場”機能で、この導入は先行する各地のファームパークを視察・検証した結果であろう。

(2) ダム湖の景観を活かした中心施設群

改札ゲートを通ると、そこはベンチが設置され、喫煙コーナーを兼ねた「インフォメーション」である。ここで車椅子やベビーカーのレンタルを申し込む。また待合い場所の機能も果たしているようである。

その右側が「研修館」、左側には土産店の「豊の国物産館」、そして「レストラン館」、「花昆虫館」が並んでいる。これらの施設群のちょうど正面、つまり駐車場のちょうど反対側に「みどりの広場」がレイアウトされている。

また、「豊の国物産館」、「レストラン館」、「花昆虫館」はそれぞれ独立した建物だが、デッキで動線がつながれている。これらのデッキから見える景観はすばらしいビューであり、眼下にある緑の広場やフラワーガーデン、その向こうに広がる日指ダム湖の水面、そして公園を囲む



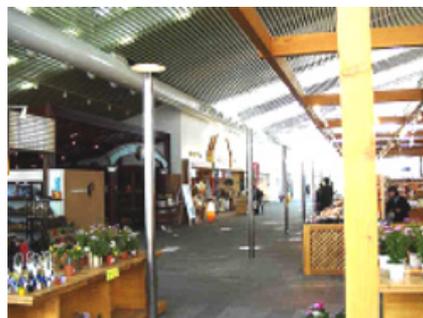
写真ではわかりにくいですが、日本一長いICの表示



正面ゲートの左右に広がる「正面駐車場」



冬季は土日祝日のみ営業の「野菜直売コーナー」



「豊の国物産館」の露天風ディスプレイ

ような周囲の山々を遠景に望むことができる。そこで、「レストラン館」では、このデッキの下にテーブルとチェアを置いて、好天時に景色を楽しみながらコーヒーブレイクできる、アウトドアテラスとしている。

○ソフトクリームが人気「豊の国物産館」

内装はウッドを基調に、普通のお店と露店風を組み合わせたような雰囲気である。お店の方はワイン、自然食品、乳製品、ベーカリー等の食品類が中心の品揃えで、露店にはこれに土産品や雑貨類が加わる。

人気は「ミルクイーランド」で売っているミルクたっぷりのソフトクリーム。冬でもよく出るという。

○山香町と安心院町がレストランを運営

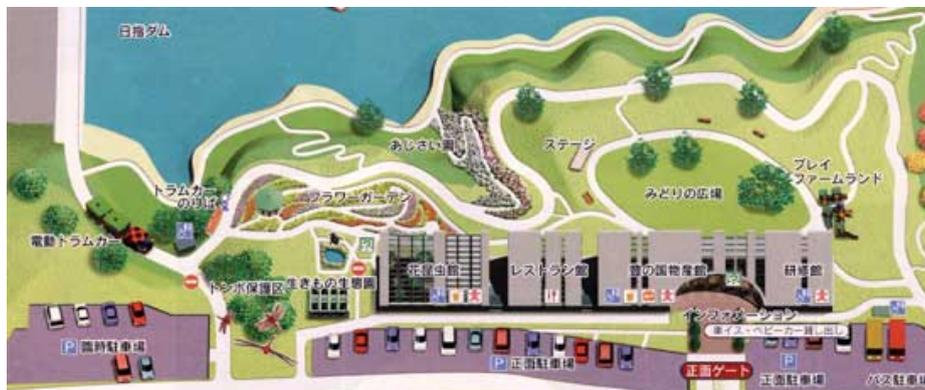
隣のレストラン館は、2層構造である。前述のように、公園が立地する山香町、安心院町がそれぞれの地域の特産・名産を使ったレストランを出店している。このあたり、“一村一品運動”発祥の大分県らしい。

1階は山香町の担当。山香牛・山香ビール（地ビール）を売りのバーベキューレストラン「ドリーム」である。地ビールについては、製造工場を併設し、レストランの中からガラス越しに見ることができる。

ビールは3種類で、黒ビールの「スタウト」、大麦麦芽100%の「ブラウンエール」、小麦・大麦麦芽各50%の「ヴァイツェン」である。

2階は安心院町で、地域の旬の素材を生かした和風レストラン「湖畔」となっている。実は昼食は、ここの「うどん付き定食」をいただいた。さすがに九州のうどんはコシがあり、ツユも出汁が効いていて、満足できた。

ちなみに1階「ドリーム」のみ、来園のピークを迎えるゴールデンウィークと夏休み期間は、公園が閉園した後も、20時まで営業している。



正面ゲート付近の施設レイアウト状況

❶ 厳冬続く地方のレジャーパーク

大分農業文化公園・「パークアルカディア」 (4)

6. 訪問してのインプレッション (2)

(3) 「花昆虫館」

地域と世界の昆虫を紹介

一般愛好家が定年後設立した会社に運営委託

「花昆虫館」の壁や天井はすべてガラス張りで、非常に明るい空間となっている。エントランスロビーには、観葉植物や木製のあずまやが設置されて、自然の暖かみを演出している。

そこからなだらかなスロープを下ると、正面に昆虫のイラストをあしらった文房具やバッチ類等を販売する「グッズ販売コーナー」がある。一部のマニア向け標本は別として、200～1,000円の価格帯を中心に、子供がおこづかいで買えるように配慮している。人気は木製の野菜・果物をふたつに割ると、メルヘンチックな小さい昆虫が登場するという玩具 (350円) である。お年寄りが孫へのお土産に購入することも多いという。

「グッズ販売コーナー」の横は、「ファーストフードコーナー」で、物販機能が並ぶ。ここには、名物の「ビワ・ソフトクリーム」(300円) がある。食べてみると、ほんのりビワの香りがして、甘いものが苦手な筆者でも何とか平らげることができた。

更にスロープを下って、やっと1階展示室に到着する。展示室の内装もまた、木目を基調とした暖かみのあるデザインで、展示什器のすべてが低く、子供がわかりやすいように配慮されている。そして、一目でスタッフとわかる、緑色のジャンパーを着た説明員が、ある家族連れに解説をしていた。「花昆虫館」の運営・管理を行う有限会社EAO (イーオ) の三宅武氏によれば、常時3名の説明員を配置しており、展示物の横に小さな文字で説明書きをディスプレイしても、たいいては読んでもらえないため、見ているお客様の横から、内容を簡単に案内して、質問があれば実物を前にさらに詳しい説明を加えるという。

○標本だけでなく、生態と一体となった展示

さらに、展示コーナーの切り口に「大分の昆虫」、「農業と昆虫」など、農業公園独自のテーマを設けて、昆虫のいろんな姿を理解できるように工夫したという。

つまり、テーマに従い標本を飾るのではなく、

(1)「自然環境と昆虫のすみか」では、川の上流から下流までの模型に、環境の変化とすみかをパネルで表示し、それぞれの場所で生息している昆虫を選択。



「花昆虫館」のエントランスロビー



メルヘンチックないちばんのお土産



対話の後詳細説明



「大分の昆虫」コーナー。この切り口は一般的

(2)“黄金虫の輝き”では、高さ約2m円柱型の世界地図に世界各国の黄金虫の標本をゆっくりと回転。

(3)“のぞいてごらん小さな世界”では、顕微鏡でみる小さな昆虫を子供の高さに顕微鏡を設置。

等のような展示方法を導入している。

また、大分在住の紙粘土細工人形師が、人物以外の初めての取り組みとして昆虫を選び、2年間かけて足の生え方、羽の広げ方等、生態的な勉強を重ねて、“昆虫の食事”をテーマとする作品を完成させた。「従来の標本だけでは表現できなかった動きをアニメチックに表現し、また昆虫ごとの食事のメニューも表示される、楽しく夢のある作品」（同氏）となったことから、虫が苦手な人を対象としたコーナーの目玉に設置している。

この他、子供からマニアに羨望のカブトムシやクワガタムシも多数が展示されていた。



「黄金虫の輝き」



「のぞいてごらん小さな世界」これらの見せ方も先例あり

○300羽以上が飛び回る蝶の熱帯雨林

展示コーナーから次の扉を開けると、そこはムツとした熱気とともに、熱帯のジャングルをイメージさせる森林空間が広がる。ここは、蝶の生体を一年中生息させているゾーンである。通路の両側には、熱帯樹、食虫植物、花等が生い茂り、その間を小川が流れ、まさに熱帯雨林の雰囲気である。50、いや100羽はいるであろう、蝶が空中を花から花へ飛び回る、まさに“楽園”である。「オオゴマダラ、シロオビアゲハを中心に、季節によって300羽以上が飛び回ります」（同氏）とその数に驚かされる。しかし、室温は約30度をキープし、湿度も高いため、汗が噴き出してくる。蝶が飛ぶ姿、蜜を吸う姿に感動しながら歩いていると、頭や肩に留まる種類もいた。外敵がない島に生息しているため、人間を恐れないのだという。途中には、サナギも展示しており（「オオゴマダラ」のサナギは金色でビックリ）、学習の要素も忘れていない。

この通路はなだらかなスロープ状で、途中にベンチやあずまや風の休憩所を設け、ゆっくりと蝶を見学できるようになっているが、暑がりの方には、この湿気と気温では長居できないかもしれない。

2階部分のある出口の先には、「蝶展示室」がある。こちらは世界中の蝶の標本展示である。

先の標本展示室と同様に、

(1)“南国の島へようこそ”で、沖縄県を中心とする南西諸島の各島の環境特徴や、そこに生息する蝶を大きな地図の上にパネルで表示。先ほどの蝶の温室とリンクしている。

(2)“美しさコンテスト”では、カラフルな蝶を同じ系列でくくり、美しい羽の模様を強調。

(3)“世界の蝶”では、生息する地域別に同系列の模様の蝶を集めた。環境が似ていると、同じような模様の蝶が分布する様子が一目でわかる。また地域ごとに標本の高さを変えて、立体的に見てもらおう。

などの工夫がある。

このように、標本をただ並べただけでも気にならないマニアックな人は別にして、ふつうの子供達がいかに楽しく、分かりやすく見られるのかを展示要件としている。今後も反応を見ながら、どんどん改善していくという。また、蝶のビューティコンテストのようなミニイベントも考えているそうだ。さて「蝶展示室」を出ると、最初の「グッズ販売コーナー」の横に出る。「入口」「出口」の表示、順路などの案内は無い。つまり、見学は、筆者が辿った順路でも、その逆でもかまわないわけである。



熱帯のジャングルをイメージした森林空間に300羽のチョウ

次ページ 6.訪問してのインプレッション〈3〉

❶ 厳冬続く地方のレジャーパーク

大分農業文化公園・「パークアルカディア」 (5)

6. 訪問してのインプレッション (3)

(4) フラワーガーデン

オランダから寄贈された日時計がシンボル

「花昆虫館」前の「フラワーガーデン」では、スロープ状に植えられた春の花々が満開を迎えていた。

この花壇は緩やかな幾何学模様で、周りを自由に歩けるようにと芝生を敷きつめている。ここにもベンチ、あずまや風の休憩所を設けている。

「花昆虫館」などを背にした眺めは、木々の緑を背景に、湖面に「オランダ風車」が投影した、印象派の色彩を思い出させる景色である。

なお、「花昆虫館」からここへの出入口前には、風車同様にオランダから寄贈された骨組みだけの地球儀が、「日時計」としてデザインされ、平坦な花園のアクセントとなっていた。とにかく、“花”は人気があって、来演者は必ずここに立ち止まる人気スポットになっているという。

(5) レイクサイドキャッスル

○電動トラムカーは大音響でサウンドスケープ演出

「フラワーガーデン」の前方に、「電動トラムカーのりば」を発見する。そこから日指ダムを越えた先にある「レイクサイドキャッスル」まで、これを利用することにする。

「電動トラムカー」は、先頭の動力車をてんとう虫に仕立てて、2両連結の客車を牽引し、誰もが一度は音楽の時間に唱和した、日本国有鉄道のテーマ曲? “せ～んるは続く～よ～ど・こ・ま・で～も～”を大音響で流しながらのんびりと進む。これは演出もあるが、歩行者の安全確保のために列車の接近を知らせるためでもある。特に日指ダムの上を通過する間は、まわりに遮蔽物がなにもないため、歌がサウンドロゴとなって園内に響き渡り、どこにいてもてんとう虫列車のかわいい姿を発見できる。

ただし乗客の立場からすると、会話が聞きとれないほどのボリュームである。もう少し落としても影響はないと思うのだが。

動力は電機モーターゆえ、不愉快な振動がなく、またどこを見ても景色がいいこともあって、とても快適な乗り心地であった。終点では、到着を待ちかねていた子供達たちまち通勤ラッシュになってしまう。

○ビッグサイズ遊具で人気のレイクサイドキャッスル

「レイクサイドキャッスル」は、公園の東側、つまり東ゲートに隣接するエリアにある。園内でも最大の遊具が置かれている。普通の公園ではまずありえないその規模に、子供は大喜びしそうである。この他、「ふれあい動物園」



「日時計」(上)と「フラワーガーデン」の景観



てんとう虫を模したトラムカーが大音量で走る



規模で人気の「レイクサイドキャッスル」

と建物前の「みどり広場」にも大型の遊具が設置されているが、こことは比較にならない。いつまでも遊びをやめない子供が少なくないという。

このエリアには、他にオートキャンプ場、体験農園、クラインガルデン、コテージ、果樹園そしてつばき園等が整備されている。

園内はとにかく広い。ここでレンタサイクルを借りる方法もあるが、我々は同園企画事業部・森明課長が運転するクルマで、この先の「ふれあい動物園」へ向かった。

○羊に赤ちゃん誕生！癒しの「ふれあい動物園」

日指湖の中心に半島のように突き出た小高い丘の上に立地する。湖面の向こう正面には、さきほどの「研修館」、「花昆虫館」等の建物、「フラワーガーデン」が見える。ちょうど反対側の位置にあるわけだ。

柵で囲まれた飼育スペースは、ウマ・ヒツジ・ヤギ等の大型動物用、ウサギ用、アヒル・カモ等の鳥用に分けられている。動物はそれぞれのんびりと日光浴中だった。

大型動物用をよく見ると、黒い小さなものがよろよろと歩いている。ヒツジの赤ちゃん、実はこのとき、生まれて3日目というタイミングであった。飼育スタッフのご厚意で、柵の中に入れてさせて頂いた。「メー」と泣きながらすぐに寄って来るこの新しい生命に慈しみを感じるのが、アニマルヒーリングなのである。

動物ゾーンの横は「風のリズム広場」。芝生の広場で、公園のシンボルのひとつ「オランダ風車」と大型の遊具が設置されている。風車は名前が表すように、実際にオランダから寄贈されたもので、中程の高さまで上ることができて、展望台的な役割も担っている。

ここは正面のエントランスから一番遠い場所にも過関わらず、景色の良さ＋動物＋たくさんの花＋芝生の広場＋大型遊具によって、子供連れ客のほとんどがこここまで足を運び、お弁当を広げる人気の場所になっている。



よろよろと歩く羊の赤ちゃん



実際にオランダから寄贈された「オランダ風車」



「クラインガルデン」。人気が高い



「日指ダム」から東ゲート付近の施設レイアウト状況

次ページ 6.訪問してのインプレッション〈4〉

❶ 厳冬続く地方のレジャーパーク

大分農業文化公園・「パークアルカディア」 (6)

6. 訪問してのインプレッション (4)

(6) のんびり島

ブラックバス・フィッシングも可能

次に向かったのは「めがね橋」と「つり橋」がある「のんびり島」である。ここは、高木が生い茂り、木陰が多い。「夏の暑い日に木陰を求めて来るお客様が多いですね。また、この辺がブラックバスの釣りポイントにもなっています。バス釣り大会を行いました。30センチ超の大型も釣れていました」(森氏)と、山中にありながら釣りファンも集客対象にできる園内のリソースを誇る。

○東ゲートと滞在型・体験型設備は一体整備

「つり橋」を渡った先に正面ゲートがあるが、東ゲートの方に戻り、先ほど通過したオートキャンプ場、体験農園、クラインガルデン、コテージ、果樹園そしてつばき園等を取材させてもらう。

まず、東ゲートにも駐車場整備されているが、これは「クラインガルデン」、「コテージ」、「オートキャンプ場」利用者に配慮してのことである。駐車場とそれぞれの機能は隣接しており、泊まりがけで農作業を楽しむ場合に利便性が高い。

また、レンタサイクルもあり、サイクリングを楽しむ場合もここからの入園が便利である。その他、このエリアにある設備を再度紹介すると、「ピクニック広場」(芝生広場)、「貸しボート」(足こぎ)、「草すべり場」、「フルーツテラス」(果樹園で栽培したフルーツを味わえる)がある。

取材時は平日しかも期間限定営業の施設(施設概要参照)が多く、残念ながらほとんどが休業中であった。

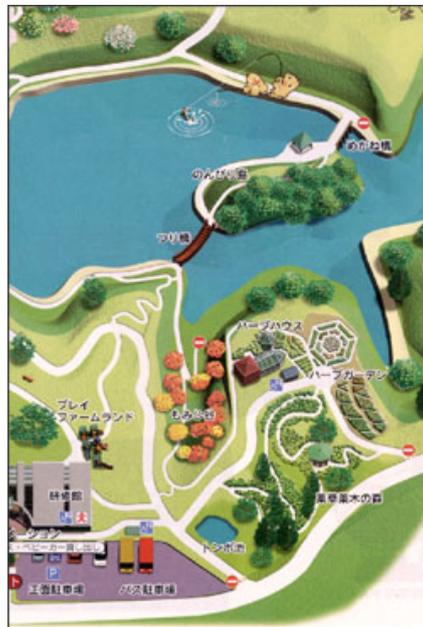
(7) リニューアル完成近いハーブガーデン

そこから、みどりの広場を通り越して、「もみじ谷」の先にある「ハーブハウス」「薬草薬木の森」へ向かう。取材時、このエリアは2002年のオンシーズンに向けてリニューアル中であった。

森氏の説明によると、ここは50歳代以上に人気があるという。実はここからの景観も、隠れた名所として見逃せないようだ。位置的には小高い丘で、手前の芝と木々、その先の「つり橋」と「のんびり島」、湖、遠くの「風のリズム広場」の「オランダ風車」と大型玩具が絶妙のバランスされた美しい景色となっている。リニューアルにより、西洋庭園風の「ハーブガーデン」の完成も予定されており、さらに“癒し”の空間が充実しそうである。



リニューアル工事中の「ハーブガーデン」



「のんびり島」～「研修館」の施設レイアウト状況



「研修館」1階の「あぜみち水族館」

(8) ガラス張りの「研修館」

以上がアウトドアゾーンで、次はメイン施設群のなかでまだ訪れていなかった「研修館」に入る。エントランスロビーは展示コーナーとして活用している。どんな展示かということ、まず、最初に目に入るのは、「あぜみち水族館」と掲示した水槽である。これは地元・大分の水田の畦道に生息する水性動物を水槽で展示したもので、水槽の下のイラスト入りのパネルで内容を解説している。

その横には、イチゴ、生花の水耕栽培の技術展示。また、壁際には「ふるさと生活技術一番さん」の作品、入口正面には「ふれあい動物園」のヒツジの毛を刈り、その毛刈りの様子を撮った写真と、刈り取った毛で編んだセーターを着たミッキーマウスが展示されていた。そして、各体験講座の実施日・内容・参加費用等を明示したメニュー、イベント案内等をパネルで掲示して、レイアウトを区別するパーティションの役割を与えている。会議室や研修室は、それぞれ天井を高く、壁には窓も設けて、明るくて広々としたスペースを確保していた。研修室の通路側には、講習・実習中の様子が通りすがりの人に見えるようにガラス張りとして、実習で作った作品を展示している。研修室内には、「親子ふれあい教室」で竹とんぼを作ったときの感想文を、そのイラストといっしょに展示していた。

[次ページ](#) 7.活性化のために

❶ 厳冬続く地方のレジャーパーク

大分農業文化公園・「パークアルカディア」(7)

7. 活性化のために

○広い規模を前提とした、来園者への事前案内が不足

森課長のクルマによる案内がなかったら、営業時間内に半分も見終わらなかったぐらい、広大な敷地である。個人のホームページに訪問記がたくさん掲載されているが、「広すぎ」「一日居てもまだ見終わらない」等の意見が目立つ。園内の移動手段は徒歩が基本で、レンタサイクル、一部「電動トラムカー」である。しかし徒歩で園内一周するだけで1時間以上かかる。これが子供連れやお年寄りだと1時間半以上であろう。もちろん、歩くことは健康にいいのだが、閉園時間が近づいてきたら、現在地からエントランスまで戻る時間を計算しながら遊ばなければならない。やはり「電動トラムカー」を循環運転させて、要所に停留所を設けるなど、移動手段の充実が必要であろう。さらに、あのサウンドスケープづくりのための大音量は、乗客はもちろん、釣り客や、芝生で昼寝中の客にはひんしゅくをかうと思うが・・・。

○「農業文化」の解釈が具体的に到達せず

また、個人のホームページには、「堅いイメージの“農業文化”はどこにあったのだろうか?」「貸し農園があるだけで農業公園?」といった疑問が見られる。実際に入園してみても、印象として(意識している人もいるであろう)、名称になっている「農業文化」はどこにあったのか?ということは否めないであろう。

それは、“農業文化”を表現・体験・学習するチャンスは、「研修館」「クラインガルテン」のみで、それ以外は“公園”“アウトドアスポット”色が濃い。さらに、農業体験が可能な2施設を利用するには申込制という限定である。ゆえに来園客が大半は、ほとんど意識外になってしまう。設立のきっかけとなった平松知事推薦の「アグロポリス博物館」とは、ほど遠いのが現状であろう。

このように、“農業文化”に触れることは容易ではない。しかし、県民がだれでも楽しめる“公園”という場の提供としてみると、かなりの充実である。これが、現在の人気につながっているようだ。

農業色が薄められている印象は、どこに原因があるのだろうか。

○「取れたて」「新鮮」農産物を販売すべき

まず、大分県の農産物、公園近隣農家もしくは公園産のモノを強く押し出していないことがあげられる。他の農業



イベントで集客を徹底する



ユニバーサルデザインは先進県大分らしい

公園やファームパークでは、“地元農家の野菜”“当公園産の焼きたてパン、手作りソーセージ”などをはじめ、地元名産食材またはそれを使ったオリジナル加工品を購入、食することができる。そして来園客はそれを通じて、地元の農産物のとれたて、できたてのおいしさを楽しむことができるとともに、地元の名産を再認識する仕組みがある。

これをきっかけとして、「農作物はどうやって作るのだろう」「どうしてカボス、ユズ、ドンコが大分の名産なのだろう」等の疑問を持ち、それが農業を知る第一歩となるはずだ。さらに、“園内名産品”のおいしさが広がれば、集客が活発化し、地域活性の一助ともなる。

次に、園内で育成して鑑賞、試食できる農作物が、季節にもよるが果樹園のみである（生花、ハーブもあるが、これを育てて販売・進呈しないため、公園の観賞用植栽と判断）。やはり野菜もあってこそ農業ではないだろうか。季節の旬、ビニールハウスで育てた一年中収穫できる品種、そしてたわわになった実り具合を見ることだけでも、農業学習の第一歩になる。さらに、ここでの収穫を購入して（できたら自分で収穫できて）オートキャンプやコテージで、自分たちの手で料理して味わえることができれば、これも呼び物のひとつになるだろう。

東園長は、「今後、子供に人気のカプトムシドームを新設予定です。また、オープン以来、あまり人気がなかったハーブ園、薬草薬木園のリニューアルを現在行っています。そして将来的には、ハーブ園は食することができる施設を、薬草薬木園は、実際に効果をお客が試すことができるような施設をつくりたい」と、そのあたりの問題意識をお持ちのようであった。しかし、税金を投入して建設した施設である以上、オープンしてまだ1年そこそこでリニューアルを言うのは不謹慎でもある。行政の限界である、マーケティングとコミュニケーション意識の欠如がこうした結果となる。

○魅力的でインパクトはあるが「花」頼みの脱却を

さらに「花は老若男女関係なく人気があります。そこで草花はもちろん、ツツジなどの花木まで充実させて、年間を通じて様々な種類の“花”を常に見ることができるよう、現在、少しずつ植え替え中」（東園長）だという。

もうとにかく苦しいときの「花」頼みが日本の集客事業のセンスである。農業公園に限らず、テーマパークや商業施設等でも、“花”をテーマとしたイベントの盛況事例を多数コンサルされているのかもしれない。

ここでも、単に観賞用植栽として短期にカネをかけるだけでなく、実際に入園者が苗を植える体験や、温室栽培の様子を見学できる施設、県内の農家で育てた農家名表示の花木販売や配布などの、農業との関連づけを意識してもらいたい。

もちろん、ここを訪れた人の意見として、「とてもよかった。今度はお弁当を持って、朝から一日ゆっくりしたい」と満足の声も多数見かける。高速道路アクセスに恵まれ、“安・近・短”の条件に合っている。このまま、“癒し”としての機能をさらに充実させてもらいたい。ただし、この、“癒し”と“学習・体験”は、どちらに比重をおくかにより、利用動向が変わってくる可能性もある。舵取りが非常に難しいのが公営の農業公園の宿命である。さらに“住民が望まない箱モノ”への批判が高まっている昨今、同施設のように公共の色が濃い施設こそ、もう少し“学習・体験”へ力を入れても良いのではないか。“学習・体験”は、学校週休二日時代のカリキュラムともなれる。

好調の今こそ、次を見据えた運営戦略構築を急ぐべきであろう。

※書籍「レジャーパークの最新動向2002」（2002年8月発行）の記事を掲載しています

[特集トップへ](#)

[グリュック王国レポートへ](#)

[マインランド尾去沢レポートへ](#)